

■ 編集後記

学会雑誌の在り方につき、このところ会合のたびに検討が重ねられている。心臓核医学会として公表・周知が必要な情報の発信ツールとして、また心臓核医学領域における研究への学術貢献としての役割が学会雑誌に求められるものと考え。これらの検討を踏まえ新学会雑誌編集委員長の元、これまでのニュースレターから心臓核医学へと雑誌名が変わり、表紙デザインもお気付きのように少し前から変更となっている。学会雑誌としては会員の研究成果の発表の場としたいということもあり、投稿受付の準備を進めてきたが、今号では初めて、原著論文の投稿を受け付け、査読を経て採択となった論文が原著論文として掲載となった。論文の内容は心筋 SPECT の技術的内容で医師にも技師にも参考となるものである。情報発信の観点からすれば、多くの日本国内の学会雑誌が和文からより広い読者層が期待できる英文に雑誌形態を変更してきているのが近年の現状である。この点については編集委員会、学会理事会でも現在今後の方向性につき検討が進んでいる。今回は今後のステップとして、まず和文での原著論文を掲載することとなったが、英文化および学会誌の方向性につき会員の先生方のご意見を頂ければと思う次第である。

卒後研修を終えて、関連病院の循環器内科で専門研修を行っていた際に研修を通じて得た課題をなんとか多くの人にみてもらえたらと漠然と考えるようになった。そんな私に上司の循環器部長がヒポクラテスの“Life is short, art is long”を元に読む人に感銘を与え、長く読み続けられるような論文を書いてみなさいといわれた。技術革新の目覚ましい現在に置き換えれば10年後にも新規性がある論文ということになるかと考える。心臓核医学領域では諸先輩方がこれまで多くの素晴らしい論文を日本から発信してきている。また近年は技師の方々も SNM などで素晴らしい発表をされている。これからの課題は日本から技師の方を含め心臓核医学に携わるより幅広い層の研究者から、各自が取り組まれた課題につき論文として情報発信をしていくことか考える。心臓核医学雑誌もそのような取り組みを発表する役割を担い、さらに心臓核医学雑誌から多くの人々の心を打つような論文、長く内容が読み継がれるような論文が輩出されることを願う次第である。

吉永恵一郎
北海道大学